

■培った雑学を活かす！ ～地域ボランティア活動での基調講演～

* / 第1回 大高について語ろう会 / *

開催日： 07年04月19日（木）

開催時間： 19：00～

開催場所： 山盛酒造 株式会社

（名古屋市緑区大高町高見）

基調講演の題名：

「戦国から現代に至る街並みの変遷と
住民の心の変化」

※「手書き資料で！」・・・との依頼で、
写真の様な発表会となりました。



■ 基調講演の骨子

名古屋市南部の年魚市潟（あゆち潟／愛知の語源）沿岸は、古代の尾張氏（初代尾張国造乎止与命）創生期より続く王国（部族国家）の首都であった！・・・と仮定しています。

今も残る特徴ある戦国期の城塞都市の痕跡と江戸末期からの古い街並み（風景）の変遷を、その時代を代表する3つの色で大きく区分し、その時々の核となる事象と、それにまつわる住民の心の変化を、歴史的な資料や史跡・遺産を用いて、分かりやすく説明しました。

「白」の時代：

名古屋市南部は、古代から江戸初期(1614)まで、白砂青松と詠われ景勝地でありました。年魚市潟沿岸には、製塩業を中心とした集落が数多く点在し、塩は塩付街道を經由して遠く信濃の塩尻まで送られ、更に信濃一円に広く行き渡っていました。

室町末期、信長が活躍する遥か以前の1500年頃、この地は日明貿易の東端に位置し、信長が権力者の象徴として取り込んだ抹茶文化より、後になって江戸期の文人達が愛でて隆盛を極めた煎茶文化（通説では江戸期に渡来する。当時の明国（中国）で最先端であった文化。）を、既に先取りしていた証拠資料（漢詩文）の解説を試みました。

また、この交易ルートを利用して、陶氏に滅ぼされた室町幕府の周防・長門の管領職であった大内氏の末裔（大高山口氏）や、九鬼水軍との権力闘争に敗れた伊勢の下村水軍の末裔（子孫）たちが、今日もなお城下に安住の地を得て暮らしている事も含めて紹介しました。

「緑」の時代：

戦国期に発達し、秀吉の備中高松城の水攻めで威力を発揮した、築堤技術とその技術者集団は、甲州武田騎馬隊が井伊家の赤備えとして取り込まれた様に、豊臣家の崩壊と共に徳川政権の中枢に取り込まれ、家康が九男の義直のため、政権内部に蓄積した資金を背景に、優秀な行政官の永井氏（永井荷風の実家）に命じ、菩提寺と一族をわざわざ知立（西三河）から星崎（名古屋市南部）へ移し、大高山口氏（代官庄屋）と共に大規模な干拓事業を進め、白砂青松と詠われた年魚市潟は、短期間の内に緑豊かな稲田と変わり、秋には黄金色の稲穂が垂れる穀倉地帯へと大変革をなし、尾張徳川家の財力（国力＝石高）を高めるのに、多大な貢献させた経緯を説明しました。

更に、永井氏・大高山口氏と共に尾張徳川家の家老職として配下に築堤技術集団を抱えていた志水氏（大高城三の丸に館を構える）とその家臣団の郷土愛について、、、志水家（京都岩清水八幡宮社家の出身）とその家臣団の郷里、”岩清水八幡宮”の男山山頂からの眺めが、大高城の”城山八幡宮”からの眺めと全く同じで、志水氏の家臣団はこの名古屋南部の土地柄がとても気に入っていた！、、、との推測を二つの地図を使って説明しました。

また、この地が白砂青松の景勝地であり、且つ日明貿易で栄えた煎茶文化の先進地との情報を文献で得ていた松尾芭蕉が、強固な堤防の上に立って、強引な権力者たちの干拓事業の是非を問い掛けた俳句と千鳥塚の記念碑の解釈から、有名な”奥の細道”執筆へ至る関係（芭蕉の心の変化）を解き明かしました。

「黒」の時代：

緑豊かな穀倉地帯からの収益を元に、次第に資本の蓄積が進み、大高城城下の富裕な農家には年貢蔵が立てられ、更に19世紀初頭には黒板壁の酒蔵（醸造蔵）が数多く造られ、江戸へ樽酒を廻船で運び莫大な収益を得る。江戸末期、町は発展を遂げ、農家と醸造業者が保有する大小の蔵々が点在する街並みに変わった。明治維新以後も、築堤技術や蓄積された資本は、東海道本線や中央西線の鉄道建設や、自動車産業の黎明期の大規模な工場誘致など、今日の区画や街並みを形成するに至った事柄についても言及しました。



画像左：萬乗醸造の酒蔵とレンガの煙突

画像右：山盛酒造の酒蔵

(参考) 大高を題材にした絵葉書：[水彩画家、浜島さん（理事）の記事](#)

基調講演の中核をなし、歴史を再認識する上でも重要な仮説となろう！・・・と
考えている下記の漢詩文や俳句における面城生独自の解釈を紹介します。

■基調講演の資料（参考）

「椿城今昔」

～わが国「煎茶」のはじまり～

写真：東昌寺の山門と本堂



大高城を詠んだ詩歌として、下記の七言絶句が伝わっています。

寄贈 日本高城主人花井居士

東樵曾與說佳名
述略能摧百萬兵
鯨海風生起波浪
憑誰喚取安邊城

大明正口五月 寧波 老仲和尚

「日本高城」とは火高見城（現、大高城）を言い。「東樵」とは、かつて大高城大手門の西にあった東昌寺（東正寺）から類推して、1504年前後の城主花井備中守（花井居士）の雅号であったと考えられます。

詩歌の内容（解釈）については、日中友好協会久野氏と中国の胡愛民氏のご協力を得て、中国の有名な仏学家で書道家の楊古城先生、曹厚德先生、天童禅寺の監院修祥法師、土塔禅寺監院可祥法師の意見として、「佳名」は「佳茗」と見るべきで、「茗」は「茶」を指し宋・明代には、天多山雲霧茶、天童山緑茶、杭州竜井茶が有名であった。・・・との回答を得ました。

また、旧東海道「鳴海宿」を訪れた松尾芭蕉の直筆となる掛軸には、
弥覚は松風の里 よびつきは夜明て からかさ寺は柚きの降日 はせお
ほしさきの 闇をみよとや 啼くちどり

弥覚：寢覚・・・・・・・・火高火上(現、名古屋市緑区大高町の古い呼び名)

松風の里：・・・・・・・・室町晩期の大高城城下の呼び名

よびつき：呼つき・・・・・・・・室町晩期、年魚市潟に面する大高城城下の浜辺の名

からかさ寺：笠寺観音・大高・鳴海の対岸に位置する尾張四観音の一つで名刹

柚きの降日・・・・・・・・雪の降る日

・・・とあり、1689年46歳の芭蕉が「奥の細道」に旅立つ2年前に、ここ大高の地は、煎茶用語で使われる「松風の里」を用いた「呼び名」が、文化人の間では定着していた！・・・と推測できます。

他にも、1567年編纂の「富士見道記」に、大高の別の呼び名として「松風の里／呼つぎの浜」との記述がある。 — 大高町誌より —

以上の事柄から推察すると・・・

煎茶をわが国へ初めて紹介したのは、中国より渡来(1654)し宇治黄檗山万福寺の開祖となった隠元禪師(1592-1673)・・・ではなく、、、

名古屋市の南部「大高」を支配していた大高城主の花井備中守が、中国の寧波に赴き、老仲和尚との交流の中で身につけた中国明代の煎茶作法を、この地に伝えたのが最初で、定説より150年もさかのぼる1504年頃には、この地に煎茶が定着していた。・・・と考えられます。

以上